シュリー・ハヌマーンの大跳躍
ラーマーヤナの物語より

第３章
成功のための決意

シュリー・ハヌマーンは、ランカープリーの外郭にある張り出した岩の陰で休み、人々が黄金の門を行き来しているのを眺めながら、この土地の状況について検討していました。

最も高い建物の上に、ラーヴァナ王の旗が翻っていました。それは王宮に違いありません。ラーヴァナは、ここにシーターを監禁しているのでしょうか。どうしたらハヌマーンは、彼女の元に行けるでしょうか。観察すればするほど、この都がいかに堅く防備されているかがわかりました。ラークシャサという鬼たちが、いたるところに立って見張っていました。

太陽が沈むと、ハヌマーンはラーマ神に祈ってから、隠れていた所を出ました。サルの赤ん坊に変装したままで、陰から陰を伝い、都の外壁にたどり着きました。まさに門を通ろうとしたとき、頭上で怒鳴り声が聞こえました。

「止まれ！　この都には誰も入ることを許されないのを知らないのか。お前は誰だ」

ハヌマーンが顔を上げると、怒ったラークシャシーが彼を見下ろしていました。

「お答えします」と、ハヌマーンはとても幼い無邪気な声で言いました。「でも、まずあなたがどなたか教えてくださいますか」

「私の名前はランキニという。この都の番人だ。ラーヴァナ王の命令でここを守っているのだ」と、鬼の女は威張って言いました。「そして私の役目は、大胆にもこの門を通ろうとしたお前を殺すことだ！」

ハヌマーンは、優しく言いました。「でも私は、この都の美しさについてたくさん聞いたのです。行ってそれを見てみたいだけなのです。どうか入れてください。見たらすぐに出て行きます。約束します」

「何とばかな子ザルだ！」と、ランキニは言いました。「私から逃れられると思うな」。彼女は手を上げて、彼を平手で打とうとしました。しかし彼女がそうする前に、ハヌマーンは、今度は落ち着いた威厳を持って言いました。

「お前は私が誰だと尋ねた。では見せてやろう」

ラークシャシーは、息をのみました。そのとき彼女が見たのは、うるさいサルの赤ん坊ではありませんでした。尻尾を立て、錫杖（しゃくじょう）を手にしたシュリー・ハヌマーンが、彼女を見下ろしているのでした。 ランキニは、その場にひざまずきました。

「とうとうこの日が来た！」と彼女は叫びました。「ブラフマ神が予言したのです。サルが私に勝ったら、ラークシャサの君臨は終わると！」。その言葉を残して、彼女は逃げていきました。そしてハヌマーンは、再びどこから見ても無邪気なサルの赤ん坊になって、番人のいない門を静かに入っていきました。

夜の空気は、笑いと音楽、踊り、絹のこすれる音、足飾りの鈴の音、濃厚な香水とおいしそうな食べ物の匂いで満たされていました。ハヌマーンは、庭園や中庭を通って進み、ついに王宮に着きました。

それは、ハヌマーンが見た中でも最も美しい宮殿でした。天上の建築家であるヴィシュワカルマが、神々の金庫番であるクベーラ王のために黄金と大理石で建てた宮殿で、クベーラ王は、ラーヴァナに奪われるまでそこに住んでいました。今、そこは香りの良い果樹に囲まれ、夜空を背景に、荘厳な白い壁が月光にきらめいていました。

ハヌマーンは、たくさんある王宮のベランダやテラスをそっと歩き回り、天幕に軽々とつかまって部屋から部屋をのぞいて行きました。彼は多くの女性を見ましたが、ラーマ神が説明したシーターの特徴に一致する人はいませんでした。夜が更けて月が高く空に昇ると、音楽や踊りは途絶え、ラークシャサやラークシャシーが寝台に大の字になって寝ているのが見えました。ついに最も豪華な寝室に来ると、ラーヴァナ王自身がいびきをかいて寝ているのが見えました。

しかし、そこにシーターがいる気配はありませんでした。彼女はどこにいるのでしょう。他の場所に監禁されているのでしょうか。

「見つけなくては」と、ハヌマーンは思いました。「シーターの知らせ無しに、ラーマ神のところへ戻るわけにはいかない」

彼は、一晩中捜し回りました。召使いの住居にも行ってみました。地下の監獄にも行ってみました。彼は至る所を捜しましたが、シーターをどこにも見つけることはできませんでした。

しかし、ハヌマーンは諦めませんでした。根気強く捜せばシーターを見つけられるとわかっていました。そうして彼は捜し続け、ついに夜明け前に、ムユウジュの木立の前に来ました。警備に用心しながら、彼はその木立に入りました。

奥には美しい庭園があり、曲がりくねった小道と清らかな小川がありました。ハヌマーンは、よく見える場所を探して木に登りました。木のこずえから、サンゴでできた階段のある小さな建物が見えました。階段に1人の女性が座っていました。その女性は痩せて悲しそうでしたが、静かな輝きがありました。シーターでしょうか。

ハヌマーンは、もっと近くで見るために、木を飛び移りました。その女性が、黄色いサリーを着ているのが見えました。それは、色あせてくすんでいましたが、そうです！ラーマ神が言った、誘拐されたときにシーターが着ていたものと同じサリーを彼女は身に着けています。ハヌマーンは、これはシーターに違いないと確信を持ちました。彼女を見つけたのです！大喜びで、彼は心の中でラーマ神にひれ伏し、素晴らしい知らせを神に伝えました。

ハヌマーンは、今が最も注意しなければならない時だと気づきました。ラーマ神が信頼して与えた使命を果たすためには、すなわち、シーターと話してラーマ神の指輪を渡すためには、彼女を驚かせてはなりません。もし彼女が驚いて声を上げたら、彼は捕まってしまいます。そこで、彼は辛抱強く待ち、シーターの番人のラークシャシーたちが仲間内で口論を始めた隙を見て、静かにラーマ神の家族の歴史とラーマ神が追放されたいきさつを語り始めました。

シーターは、ラーマ神やその父、そして兄弟の名前が聞こえてくると、耳を疑いました。彼女は、どこからその声が聞こえて来るのかと見上げました。すると、木の葉の間から小さなキラキラした目のサルが彼女を見下ろしているのが見えました。

「あなたは誰？」と、彼女はささやきました。「あなたがラーヴァナ神の変装ではないかと恐れています。それでも、あなたを見ると心が高まります」

「おお、祝福されたお方よ」と、ハヌマーンは答えました。「私は、ラーマ神からの使者です。神があなたを絶え間なく思い、もうすぐあなたを助けに来ることを伝えるために来ました」

「でも、あなたは誰ですか、どこから来たのですか」

ハヌマーンは、自分が何者であるか、そして、ラーマ神が彼女を捜すためにキシュキンダーのサルの協力を得たことを説明しました。ようやくシーターは納得し、彼は木から降りて、お辞儀をしてラーマ神の指輪を渡しました。

シーターは大きく喜びました。「あなたが本当のことを話しているのがわかります」。彼女の声は、安堵（あんど）と感謝で震えていました。「なぜならこの指輪を知っているからです。これを手にしているだけで、自分がラーマ神のすぐそばにいると感じます」

シーターは、すべてを知りたがりました。ラーマ神とラクシュマナはどこにいるのか、いつ彼女を救いにきてくれるのか。彼女はまた、ハヌマーンについても知りたがりました。彼は本当にはるかキシュキンダーの森から旅してきたのか、どうやってこの島にたどり着いたのか。

「私は、海を跳び越えて来ました」と、ハヌマーンは言いました。

「跳び越えたですって」と、シーターは言いました。「何という勇気！　そして、たくさんの鬼たちにも捕まらずに！　どうやったのですか」

「神に仕えるとき、成功しないことなどあるでしょうか」と、ハヌマーンは愛と確信で眼を光らせながら言いました。「私は、神に意識を集中していました。そして、神の恩恵が、ずっと私を支えてくれたのです」

シーターはほほ笑んで、ハヌマーンに詳しく話すように促しました。

「旅を始めるにあたっては、固い決意が必要でした」。ハヌマーンは言いました。「跳躍をするには、強さと勇気が必要でした。途中の障害を乗り越えるには、

柔軟性と抜け目なさが必要でした。あなたを見つけるには、忍耐力が必要でした。あなたに話しかけ、信頼を得るには、我慢強さと識別力が必要でした。ラーマ神の恩恵によって、私はこれらの資質がすべて自分自身の中にあることを発見し、そしてこの旅を成し遂げることができたのです」

「あなたは本当に立派です」と、シーターは言いました。「あなたは真に神に仕える者です。神が、この最も重要な使命をあなたに委ねたのも当然です」

ハヌマーンは、シーターの感謝を謹んで受け取り、木立を見回しました。番人たちが近づいてきたのです。さよならを言う時が来ました。ハヌマーンは、ラーマ神がもうすぐ巨大な軍隊を率いて彼女を救いにやって来ると、シーターに今一度確約しました。

ハヌマーンは、シーターに別れを告げて、ラーマ神の恩恵を祈り、再び海を大跳躍して帰る準備をしました。ラーマ神に対する深い献身と、揺るぎない敬愛によって、シュリー・ハヌマーンは自分の使命を果たしたのです。

***

『ラーマーヤナ』は、賢人ヴァールミーキによって書かれた叙事詩です。それはヴィシュヌ神の生まれ変わりであるラーマ神の物語を述べています。叙事詩『マハーバーラタ』と共に、インド文学の最も偉大な作品の一つとして知られています。

***

© 2016 SYDA Foundation. 著作権所有。